

後、大沢野扇状地を侵食して、下流に新扇状地を形成した。神通川の下流は、常願寺川扇状地が発達しているため、呉羽山丘陵側に押しやられ、河川の長さ比べて狭い平野しか形成し得なかった。また、急河川に珍しい中神通の輪中が、西側の段丘に制約されて形成されている。神通川を富山県内の他の河川と比べると、神通川は流域面積が広く、豊水量²⁾と渇水量³⁾の差が著しい。

このような地形を刻む神通川とその流域に展開されている利用形態の関係は、予想以上に密接であった。農業・工業・漁業・電気事業・交通・その他あらゆる面で密接な関係があった。多方面に関連していて、単純に分類できないものもあったが、農業では用水・堤外地の耕地・カドミウム汚染・輪中が、工業では運河沿いの工場群・内陸の工場群が、漁業では鮎・鱒・鮭の養殖場が、電気事業では大規模発電所・低落差の小規模発電所が交通では富山新空港・舟運が、その他では製菓業・河川敷の公園やグラウンド・廃川敷の官庁街が挙げられる。

これらの利用形態には、すべて要因があるが、地域の特性による要因と流域の特性による要因の二つに大別した。地域の特性による要因とは、都

市や村落が存在し、それらが必要としたために、その要求に応じて神通川の水やその流域の土地を使うようになったもので、堤外地の耕地、富山新空港、製菓業、工業用水、土石採取がこれにあてはまる。流域の特性による要因とは、神通川が存在したために、その水の有効利用（中には、結果的に悪用されたものもあったが）を考えた結果生じた利用形態で、農業用水、カドミウム汚染（悪用されたケースである）、輪中、発電所、鮎・鱒・鮭の養殖場、土石採取、工業用水がこれにあてはまる。土石採取、工業用水は、どちらの要因にも含まれるが、これは、ほぼ同等にウエートが置かれていると考えられるからである。

以上のように、河川の流域に見られるたった一つの土地利用、あるいは水利用についても、複雑な要因や社会的背景があるといえる。

- 1) 大沢野町、八尾町、婦中町、富山市を対象地域とする。
- 2) 一年を通じて95日間一定流量を下らない水量
- 3) 一年を通じて355日間一定流量を下らない水量

都市の緑に関する考察

——東京都文京区・世田谷区を事例として——

木村 真理子

東京は江戸時代には緑の豊かな都市であったといわれるが、現在は世界でも最も緑の少ない都市の一つとなってしまった。しかし、現在の東京に緑が全く分布していないわけではなく、ある程度の緑は残存している。そこで、本論文ではそれらの緑、特に樹木がなぜ残存しえたのか、その要因を探ることを目的とした。対象地域としては、都心部に位置しながら樹木率の高い文京区と、東京都区部の周辺部に位置しており文京区と同程度の樹木率を示す世田谷区をとりあげた。考察の方法は、両区が行った調査の結果をもとに緑の分布状況を把握した後、両区の地域の現状と緑の関係について考察するため、統計資料をもとに地域変数と樹木率、草地率、緑被率の相関関係を算出した。また、両区のなかから「樹木率の高い地区と低い

地区の両方を含む地域」を1地域ずつと、「樹木率の高い高級住宅地」を1地域ずつとりあげ、江戸時代以降の地図をもとに市街化の過程と緑の関係について考察し、さらに両区の緑に関する施策について聴取調査を行った。

まず両区の現在の緑の分布状況についてみると、文京区では緑の分布に偏在性がみられ、台地上に多く、低地には少ない。特に旧庭園や寺社、大学などが果たしている役割は大きく、これらの公共的・半公共的施設に緑が集中している。一方世田谷区では、多摩川ぞいの低地に緑が少なく国分寺崖線ぞいで多いという傾向や、環状8号線の西側及び国道246号線の南側に緑が多いという傾向がみられるものの、文京区と比較すると緑は全体に平均的に分布しているといえる。また緑は一

般の住宅地を中心に分布しており、公共的・半公共的施設に集中しているようなことはない。

次に、地域変数と緑の相関関係の算出結果について考えると、文京区では樹木率が「海拔と強い正の相関関係を示し、事業所密度、工場密度、商店密度、構造物被覆率とは強い負の相関関係を示した。これは、台地上に公園、学校、住宅地が分布し、低地には密度の高い商工住混在地域が形成されているという、地形による土地利用の差が緑の分布状況に反映されたものと推察できる。世田谷区では樹木率と起伏量が正の相関関係を示し、斜面地に緑が残存していることが推察されたが、他の要因と緑の関係は明らかにはならなかった。

さらに、市街化の過程と緑の関係についてみると、文京区の2地域では、江戸時代の土地利用が明治時代以降の土地利用に大きな影響を与えており、それが緑の現状に重要な影響を与えていることが判明した。つまり、江戸時代に幕府によって台地上に武家地が、低地に町屋が開発されたことが、現在の台地と低地の土地利用の差に密接に結びついており、それが緑の分布状況に反映されているといえる。一方、世田谷区の2地域について

は、宅地の敷地面積の大小や宅地開発の計画性などが緑の現状に影響を与えていることが感じられたものの、市街化の過程と緑の関係にはっきりとした傾向はみられなかった。

以上から、文京区では地形が緑の残存要因として非常に重要であると考えられる。世田谷区でも地形が緑の残存要因となっていると考えられるが、それは文京区におけるほど重要なものではないといえる。また、両区の緑の残存要因にこのような差異が生じた原因としては、両区は地形的には似ている点があるものの、都心からの距離が違うために市街化の生じた時期が異なった点をあげることができる。

さらに、東京では現在、地価高騰という現象がおきていて、緑の分布状況や残存要因に変化が生じる可能性がある。このような状況の下で緑を減少させないためには、行政の施策が今まで以上に重要になるといえよう。行政の施策が効力を発揮するには住民の協力が不可欠であり、今後は住民と行政の協力関係や住民の緑に関する意識といったことも、非常に重要な都市の緑の残存要因になると思われる。

地場産業と地域の発展

—岩槻市の人形生産を事例にして—

柴田佳子

埼玉県岩槻市は、人形製造業・特に節句・ひな人形の伝統的地場産業地域となっている。その出荷額は全国一位となっており、しかも、人形産地の中では全国唯一の産地完結型である。しかし、近年岩槻市が東京に近接する有利な立地条件を持つために、特に東京から金属・機械工業をはじめとする近代工業や商業・サービス業などの事業所が移入し、急速な都市化が進行している。また、人口も昭和40年代より急増し、東京のベッドタウンとなっている。

岩槻市の工業出荷額の中でも、人形製造業の占める割合が低下し、金属・機械工業を中心とした近代工業の割合が増加している。時代の変化のみならず、人形業界、岩槻産地の構造問題も表われ現在、人形産業は様々な問題に直面している。伝統産業の存続と近代工業の共存の方向を地域との

関係を含めて明らかにすることを研究の目的とする。

研究の方法としては、文献調査、聞き取り調査、現地調査等を行い、その結果を考察する。

岩槻人形は、産地内の完全な社会的分業体制で生産され、各生産部門はほとんどすべてが手作業である。生産形態は近世以来の間屋制家内工業であり、人形の部品生産に従事する頭・衣装・手足・小道具の専門業者とそこから供給される部門を完成させ市場へ出す製品間屋の二つに大別される。専門業者は、そのほとんどが家族労働中心の零細企業であり、その生産性はけっして高いとは言えない。

岩槻人形産地の抱えている問題点として、第1に、人形産業の構造問題を考えてみると需要の低迷があげられる。これは出生数の伸び悩みとひな